



山岡鉄舟

# 徳川家臣団大会2018

## 江戸城無血開城と山岡鉄舟

全生庵住職 平井正修氏 しょうしゅう



徳川みらい学会第1回講演会「徳川家臣団大会2018」を4月16日、しずぎんホール「ユーフォニア」で開催。明治維新150年にちなみ、静岡ゆかりの山岡鉄舟に焦点を当てたプログラムを実施しました。

前半は、静岡県舞台芸術センター（SPAC）の俳優・奥野晃士氏が、歴史動説「鉄舟危機一髪 苦難の薩埵峠越え」と題し、鉄舟が幕府の意を受けて駿府に乗り込み、清水次郎長の助けも借りながら

西郷隆盛との面会に至るまでを下ラマチックに披露しました。

後半は、鹿児島からゲストとして招いた西郷隆盛のひ孫の陶芸家・西郷隆文氏のインタビューをはさんで、全生庵住職の平井正修氏が「江戸城無血開城と山岡鉄舟」と題して講演。最後に徳川宗家18代徳川恒孝氏のご子息・家広氏（徳川記念財団理事）が挨拶。

会場には、徳川家臣団の子孫の皆様を含め、約500名が来場。平井正修氏の講演要旨は次の通り。（文責：企画広報室）

### 書、剣、禅を極める

全生庵は、山岡鉄舟が明治16年に創建した臨済宗の寺で、東京都台東区谷中にあります。幕末から明治にかけて、どうやって新しい日本をつくるかを真剣に考え、無念にも命を落とした人たちを弔う場所です。本尊は江戸城の守り本尊であった葵正観世音です。

鉄舟は1836年、600石の小野家の五男に生まれ、10歳の時に父が飛騨郡代に任命されたため、高山に移住。書を学んでいた岩佐二亭から15歳の時に弘法大師入木道52世を受け継ぎました。

両親が高山で亡くなると、5人の弟を連れて江戸へ帰り、狂気の如く剣道に精進。昼は剣、夜は坐禅の生活をおくり、剣では無刀流を極め、禅では京の天龍寺の滴水和尚から印可を与えられました。

坐禅を始めたきっかけは、武家に生まれ、敵に向かい、死に臨む時に、自分の心が生死を考えない不動心を得る方法を父に聞いたところ、胆を練るには坐禅がいいと言われたからです。

20歳の時、槍術を学んでいた山岡静山が亡くなり、山岡家の養子となりますが、生活は貧乏でした。

### 西郷隆盛との談判

時代は、風雲急を告げる幕末維

新となり、鉄舟は尊王攘夷党を結成し、危険人物とみられます。

1868年、徳川慶喜公の命を受けた鉄舟は、勝海舟らに相談に行き、駿府に滞在する西郷隆盛との談判に向かいます。「談判筆記」によれば、西郷「いま、先生（鉄舟）に来ていただいて、江戸の状態もよく分かった。その事情を大総督宮へ言上するから、しばらく待て」。西郷が戻り、大総督宮から五カ条の条件が下げ渡されました。

- 一、城を明け渡すこと。
  - 一、城中の人数を向島に移すこと。
  - 一、兵器を渡すこと。
  - 一、軍艦を渡すこと。
  - 一、徳川慶喜を備前へ預けること。
- 西郷「これだけの条件が整えば、徳川家と江戸を攻めるのは止めましょう」。鉄舟「慎んで承ります。しかし、主人慶喜を備前へ預けることはできません」。西郷「朝命なり」。鉄舟「島津公がもし朝敵の汚名を受け、あなたが降伏の使者として来た時に、あなたは島津公を敵方に渡して、安閑として傍観することができませんか」。西郷はしばらく黙念してから「先生（鉄舟）のおっしゃる通りだ。慶喜殿のことは西郷が引き受けます」。こうして談判は成功しました。